地域と学校　その19

いしぐれこどもデザインワークショップ

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

石樽（いしぐれ）小学校の水曜日午後2時から4時は「わくわくスクール」という時間です。地域住民がゲストティーチャーとなって参加を希望した子どもたちを相手に、わらべ唄や昔の遊び、作って食べる、花遊び等々の教室を行っています。私もこれまでに名古屋市内のキャンパスや商店街、長屋の残るまちを舞台に、子どもたちが建築やまちを見つめ、さらには発信するワークショップを企画してきており、常々学校でやってみたいと思っていました。そこで、ワークショップの企画を申し入れたところ、快諾いただき、年4～5回開催しています。研究室の学生と私で企画し、聞きつけた下級生や学外の学生が時々参加しています。今回はこの「いしぐれこどもデザインワークショップ」の取り組みをご紹介します。

思案を重ねて早4年

いしぐれこどもデザインワークショップは2005年度から開始し、今年が4年目。11月26日に行ったワークショップは21回目でした。シェルターやドーム、自分の部屋など制作系の内容や、学校の各所、各部分をクイズ形式で探しながら学校を理解する調査・発見系の内容が中心で、学校の授業では扱わないような対象や方法を取り込むのが基本です。

私の子どもとのワークショップ経験は約10年になりますが、研究室の学生は初めてワークショップに参加する、また企画から取り組むのは初めてという人がほとんどです。それでも、このワークショップでは、当初から基本的に担当の学生に毎回の企画を考えてもらっています。1年目は学生も張り切っており、またデザイン志向の学生も多いため、知恵を絞ってオリジナルな企画を実施することをモットーとしていました。しかし、オリジナルな企画を考え出すのには相当の知識と技量を要しますので、そう簡単にオリジナルな企画はできません。ですから、4年間の実践はスムーズだったわけではありません。

そこで、子どもたちの反応も見て、2年目からは良い企画や内容が既にあるのであれば、それを参考にしながらアレンジしようということになりました。子どもたちがデザインという行為に触れ、楽しむことが第一の目的であるならば、オリジナルな内容に強くこだわる必要はないだろうと考えたのです。

例えば、自分の分身を作って、それを使って部屋の高さを測るというワークショップは、建築学会の子ども教育事業委員会で継続して実施している「測る」企画の中の一つをアレンジしたもの。また、子どもたちに大好評の新聞紙エアドームは、建築と子どもたちネットワーク東京の実践によるものです。

また、自分の体の何倍かを計算する、学校のいろんな場所の温度を手作り温度計で測る、いしぐれカルタで新入生に学校を紹介する作文をするなど、図画工作だけでなく、算数や国語、理科など学校の学習科目との関連も多少ながら意識しています。

子どもたちを2時間どう引きつけるか？

テーマだけでなく、毎回の進行プログラムも重要です。ある時、ワークショップの最中に遊び回っている子どもたちの様子を見た学校の先生から注意を受けたこともあって、子どもたちといかに2時間を過ごすかということが毎回重要な検討事項になりました。私たちは教育学の専門ではないので、子どもたちを上手く集中させる方法を習得しているわけではありません。試行錯誤を重ねました。

しかしその中で、時間が余ると遊んでしまうのであれば、もっとワークショップに遊びの要素を入れようというアイデアも生まれました。今年6月のワークショップに参加した子どもたち30人に対して行ったアンケートでは、次にやってみたい内容として、①さがす 12人 ②あそぶ 12人 ③つくる 4人 ④しらべる 1人という結果でした。子どもたちも、学生のお兄さんお姉さんと遊ぶことは大事な目的なのです。例えばこの11月26日の身長の2倍の長さのダンボールを輪にして、それを転がしながら学校の各所を測る企画では、最後にチーム対抗のレースをやり、大盛り上がりでした。

「みんなでつくろう!エアドーム!」
新聞紙をはりあわせてエアドームの屋根と床をつくり、大きな扇風機で空気を送って膨らまして、中に入って遊びました。2回目の企画では中からライトアップも。

「ダンボールのワッカで長さをはかろう!」
身長の2倍の長さのダンボールを輪にして、子どもが中に入って転がしながら、廊下や中庭の長さを測り、どのチームが一番正確かを競いました。

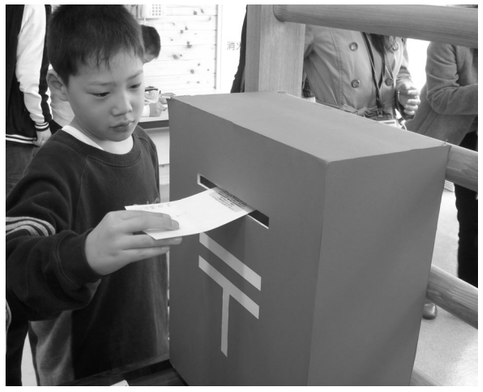
コミュニティスクールの当事者になりたくて

ではなぜ、このようなワークショップを石樽小で実施するのか。その理由の一つは、コミュニティスクールとして出発した学校の当事者になりたかったのです。計画段階での地域の方々の活発な議論の様子、そして議論だけでなくその行動力が、コミュニティスクールの運営にどうつながっていくのか。研究者としてもとても関心がありました。計画時のアイデアや熱意が実際の使い方や運営にどう引き継がれるのか？　そのためには、その運営に私も参画する必要があると感じたのです。また、この学校空間はどのように活用できるのかを、実際に使いながら確認してみたかったのです。

そんな意図を知ってか知らずか、ワークショップを重ねる中でこの学校の空間的な特徴や利点に気づく学生も出てきました。筆者の研究室の学生有志は、今年度から名古屋市の小学校のトワイライトスクール（放課後の学校開放事業）で助成金を取得してワークショップを自主企画しています。訪問する学校は標準設計の学校ですが、ある学生が「石樽小では、特別教室や小ホールがまとまっているので、内容に応じて時間毎に使い分けができるんですが、名古屋の学校ではできないんですよ」という感想を漏らしました。新校舎建設委員会が意図していた一体的な利用ができる地域開放ゾーンの特徴を、実践を通して指摘してくれたのでした。

子どもたちのデザイン体験

今もなお学校で建築やデザインにちなんだ学習は、意欲ある先生によるごく一部の取り組みに留まっています。教科学習でも、社会、生活、家庭科、保健などで住まいや広く建築や地域環境に関する学習は実施されていますが、体験的、体感的な学習までは至っていません。石樽小学校でのワークショップにおいて、普段の学校では経験することがない大きさの制作や、大学生という親しみやすい大人と接し、建築やデザインにちなんだ創作を行い、さらには作ったもので遊べることは、子どもたちにとって参加意欲を引き立てる要因になっていると、毎回の子どもたちの様子を見ながら感じます。回を重ねる毎に参加希望者は増えており、今年度1回目のワークショップ「新聞紙ドーム」は全校生徒の1/3にあたる100名の申し込みがあり、泣く泣く抽選で30名に絞りました。



「ボクのワタシの学校自慢」
子どもたちと一緒に校舎の写真撮影をし、ベストショットをはがきに印刷し、学校自慢や思い思いのメッセージを添えて、遠くに住む知人に送りました。

子どもたちのレスポンスに一喜一憂

学生たちには、自らが企画し、実施したことのレスポンスを肌で感じ、そしてそれを次の企画に反映して欲しいと常々話しています。というのも、ワークショップの企画もある意味、建築の計画や設計行為と同じではないかと考えているからです。2時間という比較的短い時間のワークショップですが、企図したことへのレスポンスはすぐに、そして確実に子どもたちから返ってきます。やった!と思う日もあれば、反省を抱えて帰る日も。そこで、最近では毎回のワークショップの準備に約1カ月かけています。担当グループが案を出し、筆者を含む全員で検討し、1週間前には学生同士でリハーサルを行って当日のプログラムの確認をしています。

もう一つは、他者にアイデアを伝え、一緒に取り組むためには何をすべきかを考える機会になっています。4年生や院生は、建築やまちづくりに関してそれ相応の知識と技術を備えていますが、ともするとその専門の中でのみ通じる言葉でのコミュニケーションになりがちです。子どもたちという、専門用語が全く通じない相手に、考えてきた企画の楽しさをどう伝えるか。ものの形、人の姿、雰囲気などを総動員することになります。ある学生は小道具に懲り、別の学生は2時間のプログラムを丹念に検証するなど、毎回の担当者は頭をひねっています。

「紙パックでブロックを作って遊ぼう!」
牛乳紙パックでハニカム構造のブロックを作り、スクリーンに映し出された3次元の形を積み木のように組み立てるのを競いながら、ハニカム構造の強さを体感しました。

新鮮な目で建築やまちを見る

私がこのようなワークショップを続けているのは、何よりも建築やまち、デザインをテーマにして、子ども、学生、そして大人が一緒に夢中になれる時間が、またそれを仕掛けることが楽しいから。そして、この楽しい時間の中で、子どもたちだけでなく企画する私たちも、建築やまちを新鮮な目で見つめ、新しい「気づき」が得られたらと思っているからなのです。

私の研究室のホームページで、このワークショップのプログラムや様子を紹介しています。
URL:http://comweb.campus.provost.nagoya-u.ac.jp/komatsu/html/3activities.htm